

前青年期の親しい同性友人関係"chumship"の心理学的意義について

— 発達の・臨床的観点からの検討 —

須 藤 春 佳

はじめに 青年期の友人関係は、この時期の自己形成において重要な意味を持つといわれる。中でも、米国対人関係学派であり精神科医でもあったSullivan H.S. (1953) は、前青年期における同性同年輩間の親密な友人関係を"chumship (親友関係)"と定義し、この関係の発達促進的側面のみならず、心理治療的側面をも重視した。彼は友人間の親密な関係を重視したと言えるが、この関係のどのような性質が発達促進的であり心理治療的なのだろうか？本稿では、前青年期の同性友人関係に関する諸理論や研究を概観し、その発達促進的意義、治療的意義、そして病理的側面との関連を取り上げ、発達のおよび臨床的観点から、chumshipという関係の心理学的意義について検討する。

1. 前青年期における親しい同性友人関係

1. Sullivan, H.S. の人格発達理論とchumship (親友関係)

親密な友人関係の形成を前青年期の重要な発達課題であると指摘した精神医学者として、米国対人関係学派のSullivan, H.S. が挙げられる。「対人関係論」とも呼ばれるSullivan (1953) の人格理論によると、人間の人格の発達、人々の間で連続して進行する相互作用の中でのみ発達する。そして人格的発達とは人との間で体験された、共有経験の所産と考え、対人的成熟とは、他者への関わり合いを増大させていく能力と考えられている。Sullivanによると、人格的成熟は個人が関わる対人経験に依存しており、長期にわたる関係づけのあり方の体系を通して達成される。対人的に成熟させる誘因は、主に生物的欲求である"満足"と社会的、対人的欲求としての"安全"であり、これは"重要な他者"とのあいだの互恵的やりとりに関係している。

幼児期 (infancy) においては、重要な他者は主に養育者である母親あるいは母親代理となる。身体的な欲求に発するやり取りに始まり、養育者との間での対人的コミュニケーションを通して人格形成が始まる。小児期 (childhood) は、意味ある言葉を獲得するときに始まり、他者の人格への調整が要求され、行動を修正することや、競争と妥協の初歩を学ぶ。最初の社会的人格成立の時期である児童期 (juvenile period) には、仲間と経験を共有する欲求が出現し、社会的自己調整の始まりの傾向がみられるが、この過程は比較的自己中心的なところにとどまる。

前青春期 (preadolescence) には、満足欲求や安全欲求を経験する重要な他者として、仲間が親と同等かそれ以上に重要となり、児童期までとは異なる劇的な心理発達上の変化が生じる。Sullivanによって8歳～12歳頃と規定されるこの時期には、真の意味での対人関係上の親密さ (intimacy) が現れ、自分とほぼ同等の位置にある相手との、水入らずの関係に入りたい、という欲求が出現する。児童期には、自己中心的で基本的に複数の友達関係であったのが、前青春期

ではある特定の相手の満足と安全保障感が自分のそれと同等の重要性を持つという意味での「愛」の始まりがみられる。「愛」の初期の形態は同一視できる相手を対象とするので、同性同年輩の相手を選ばれ、このような家族外の同性の人物との親密な関係は「親友関係 (chumship)」、その対象人物は「親友 (chum)」と表現される。「前青春期の静かな奇跡」とも言われるように、親友を得ることは、対人的成熟に上昇する大きな転換点であり、この移行をうまく経験していない人は、他者を、満足か欲求不満をもたらす存在としてのみ見続ける。一方でうまく経験できた人は、安全、親密性や性愛の満足を含めて、初期青春期 (early adolescence)、後期青春期 (late adolescence) にかけて成熟した対人関係を持てるようになる。

前青春期の親友同士は多くの時間を共に過ごし、互いの感情や考えを包み隠さず分かち合い、過去、現在を問わず互いの生活の多くの特徴に関して、健全な合意による確認 ("合意的妥当性確認") を促進していく。このような体験によって治療的な作用が及ぼされると考えられている。

2. 精神分析的観点からみた思春期の同性友人関係

Blos,P (1962) は、精神分析的立場から思春期の心理発達について述べている。Blosは、青春期を、前青春期 (preadolescence)、初期青春期 (early adolescence)、中期青春期 (adolescence proper)、後期青春期 (late adolescence)、後青春期 (post adolescence) に分類した。Blosによると、潜伏期においては欲動が自我に比べて劣勢で、子どもたちは身体的にも精神的にも安定した成長、発達を遂げるが、青春期との移行期である前思春期以降、成長の加速が心身の平衡を乱し、精神的に不安定となる。思春期になると、「私は誰か?」という問いにおける自己定義へのきびしい試みがなされる。この時期は一次的愛情対象 (すなわち両親) からの分離を繰り返し試みる時期であり、「同性の仲間たちとの親密な理想化された友情の高まりの波動」が起こり、「新しい価値へのごこちない手探りが現れる。」また、哲学的、政治的、社会的問題への関与がみられるようになる。このように、思春期になると同性友人の存在との親密な関係が生じ、これまでとは異なる新たな世界へ開かれていく様子が示されている。

3. 友人関係の発達の变化とその時期について

ここでは、児童期から前青年期にかけての心理発達と友人関係の変化について概観する。楠 (2002) によると、抽象的思考が始まり「発達の節目」とも言われる9歳頃には、対人関係においても、互いの視点を相互的に関連付けて理解する力が獲得されるという。子どもたちは仲間集団を形成するようになり、「我々意識」の高まりがみられ、一般的にこの時期はギャングエイジと呼ばれる。Youniss,J. (1980) は、この時期の友人関係の維持には、双方が相手にとってプラスの意味をもつ行為や態度を相手側に示すことが必要と考えられるようになるという。次に、11歳～13歳頃にかけて、前青年期の変化がみられる。この時期はPiaget,J (1972) による「形式的操作期」への移行期でもあり、このような論理操作の発達とも関連して、個人相互の関係においても複数の観点を考慮した上で個人間の平等を実現することが可能になる (楠,2002)。友人関係にも質的な変化がみられ、Younissによると、12歳頃からの友人関係では、友人と友人でない仲間とが明確に分化してくるという。友人となる基準は、「よく話して、お互いによく理解しあう」共通理解や、共通の性格があること、互いに「同質性」があることが重視されるようになる。

また、Selman & Schultz (1990) は、友人関係の持ち方を社会的認知の発達と関連させて捉えている。Selmanらによると、友情は、自己中心的な理解から、一方向的な理解、互恵的な理解、

相互的理解へと発達する。Sullivanのchumshipにみられる関係とは、第三者の視点から自他の相互作用をみるという社会的視点取得能力が必要な相互の関係であり、この関係への移行は前青年期から青年期前期頃に起こることが多いという。国内においては、保坂・岡村（1986）が、青年期の友人関係の発達段階として、1.gang-group（外面的な同一行動による一体感を特徴とする関係）、2.chum-group（内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とする関係）、3.peer-group（内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態）の3段階の位相を示しており、小学生の高学年ではgang-group、中学生ではchum-group、高校生ではpeer-groupが中心になるという。これらの研究から、前青年期にはgang-groupからchum-groupへと、友人関係における転機が訪れることがうかがわれる。以上をまとめると、前青年期には、発達の変化に伴い相互性のある友人関係を持つようになるとともに、友人間では内面の類似性によって結びつく傾向が強いということが言えよう。

このように、厳密な時期の区分や名称は諸家によって異なるが、10歳前後における同性同年輩の友人との親密な関係の出現が指摘されている。Blosは性器的な欲動が発現している思春期にこの同性の友人への流れを位置付けているのに対し、Sullivanはそれ以前の段階に位置付けているという違いがある。一方、Blos自身、実際の発達において、明確に時期を区切ることはできないと述べており、またSullivanが晩年には前青春期の開始を2～3年遅らせて考えているとの指摘もある（Chapman, A. & Chapman, M. 1980）。以上より、親しい同性友人関係の出現する時期を厳密に特定することは難しいと考えられるため、本論ではおよそ10歳前後～14歳前後と考え、笠原（1976）の区分¹に従い、“前青年期”と呼び、論を進めていくこととする。

II. 発達の側面からの検討

では、chumshipに示されるこの時期の親しい同性友人関係の、どのような性質が、いかなる点で発達促進的なのだろうか。以下で検討していくこととする。

1. chumshipのその後への影響

これまで、chumshipの前青年期以降への影響について、国内外を通してさまざまな研究がなされてきた。Chumの心理的影響に関して、愛他性（Mannarino,1976,1979）、自己概念（Mannariron,1978）、親の離婚を経験した後の心理的適応（Lusting et al.,1992）、青年期の精神的健康（Bachar et al.,1997）、成人期の適応（Bagwell et al.,1998）などが明らかにされている。このように、chumは家庭環境や親子関係による否定的影響からの防壁あるいは緩衝として機能する可能性が示された。国内の研究では、長尾（1997）が、前思春期（小4～小6）女子のchumの有無は高校生女子において、親子関係上の葛藤や自我同一性確立の葛藤の程度と強い相関がある事を示している。また須藤（2003）は、前青年期にchumshipの体験をすることと、自分をめぐる主観的感覚である「自己感覚」との関連を検討し、その結果、前青年期において特定の親しい友人に内面を打ち明ける体験をしたことが、自分に対する安心感や温和な感覚と関連することが示された。さらに田中・吉井（2005）では、「チャム体験」と「家族凝集性」が「学校接近感情」に及ぼす影響を調べており、男女ともチャム体験が高いほど学校接近感情も高いという結果が得られたことから、学校でのチャム体験の重要性が示唆されている。以上のように、国内外の実証的研究を通してchumshipの心理発達上の意義が示されている。

臨床場面では、角野（2004）が、自我同一性の確立を始める青年期前期は、一見何も起こっていないように見える「凧」の時期にあたる前青年期をどのように過ごしていたのか、また内面の成長がどのように進んだのかに大きく影響されている、と指摘する。そして同性同年齢の相手との親密な関係が、自分自身の満足と安全つまり自我の確立のために前段階として必要になるという点でchumshipの重要性を述べ、前青年期という「凧」の時期に、chumshipがうまく心の中で働かなければ、青年期の段階で危機となる同一性の拡散が起こる可能性、もっとも深刻なものとしては統合失調症に罹る可能性が高まる、と述べている。

2. chumshipの発達促進的意義—心理発達課題との関連より

（1）移行期における心理的保護の役割 前青年期は、心身ともに急激な変化を迎え、児童期までの親に守られた世界観が大きく変化をみせる時期である。また、必ずしも意識的でないにせよ、この時期に経験する親からの内的な分離に伴う喪失感や寂しさがあるだろう。ここでの同性友人との親しい関係は、そのような不安を埋め合わせる働きがあるのではないかと。Blos（1962）によると、この時期に少年少女は両親から距離を置き始め、内的には両親表象からの脱離がおこり、リビドーを向ける家族外の新たな対象を求める。今までのように子どもとしていたこともできず、かといって親から離れて自立することもできない、新たな自己を模索し始める過渡期にあって、友人の中に自分と同質のものを見出そうとし、安心感を求めるのではないかと。楠（2002）は、この時期が親からの分離を行う自我発達上の危機を迎える時期であるため、親との関係における「依存と自立の両価性」の強まりと、同質的な友人関係における「密着性」の強まりが密接に関連し合いながら自我・社会性の発達過程が展開していく、と指摘する。

Sullivanは前青年期の親友関係において「自分が他人と違っている者だという感じを非常によく治してくれる」と言い、安全保障感の喪失の歯止めとなってくれる存在としてchumを位置づけている。また三好（2006）は、この時期の同性友人関係は、心身に著しい変化の起こる移行の淵をめぐる実存的基盤を失った青年が現実世界とのつながりを回復するため、危機を共有するもの同士の間で生成される心理的保護の器として理解できるのではないかと示唆している。前青年期の青年にとって、同類だという感じは安心感、精神的安定を与えられるものであるといえよう。このように、移行期における心理的保護の役割を担うということが考えられる。

（2）同類性を感じられる存在—モデル像としての同性友人

Blos（1962）は、この時期には自己愛的な対象選択が繰り返され、友人関係の中で互いに相手を互いに理想化するという。つまり自分が所有したいと思う性質（自我理想）を友人の中に見出し、愛し、賞賛して友人関係の中で代わりの人物によって所有する。前青年期に同性の友人と親密な関係を築く事は、親との交流では見出せなかった新たな自分を発見し、未だ不確定な自分のあるべき姿を模索するという発達上の一過程と考えられる。この時に同性友人は同一化を行う上で大きな準拠枠になるだろう。さらに、この時期に家族外の他者に対し愛着や親密性を持ち始める事は、後に異性との関係を築くための第一歩ともいえ、まずは自らの性同一性を確立するため、同性との親しい関係を築く事が課題であるといえよう。この時期に健全な親友関係がもてないと、後の人生における両性双方との親密な人間関係形成のための備えが不十分になるといふ、異性関係へと移行する過程で同性関係を築く事の重要性はSullivan（1953）およびBlos（1962）によって指摘されている。

(3) 内的世界と現実世界の媒介的役割

Sullivan (1953) は、親友関係にある二人は他者と自己の体験を比較する事により自分の人格に修正を加える能力が急速に発達し、自己や他者についての自閉的幻想的な考えが訂正され、以前の時期に生じた人格の歪み、心理的問題をも修復しようといった。前青年期の親友関係において人間は生まれて初めて自由に自分を表現できるようになり、自分の内面を他者と相互に検討する事ができると気付くことで、「共通の人間性」の存在を知り、今までより「全幅的に人間」になると示されている。彼らはここで保護、指導関係とは異なる対等な1対1の関係を経験し、そこでの共感的な交流によって、自分の内面世界が現実の誰かと共有されることに気付き、自己と他者の共存性を感じるのであろう。Derlega & Chakin (1975) は、親密な友人関係における自己開示の価値として、「心に秘めた問題を共有することで自分の問題が特別なものではないことを発見するきっかけになる」、「自己開示することによって自分がどのように振る舞うべきかフィードバックを得、不確かさを減ずる」ことを挙げている。親密な友人関係における自己開示によって、自分の内面がひとりよがりのものではなく、誰かと共有することができることへの気づきは、人とのつながりを感じる基盤となりえ、安心感とともに、現実世界との接点を見出すことが可能となる。Sullivanはまた、「性を同じくする仲間たちのうちで、1人だけ、本人に仲間たちとうまくやる術を親切に手ほどきしてくれた子が、本人にとって特別の大切な子になる」と、友人が同年齢集団への参入にあたって、橋渡しをする役割を果たすことを示している。このように、前青年期の同性友人は、内的世界と現実世界の媒介的役割を担っていると考えられる。

以上より、chumshipは人間の心理発達において、発達促進的意義をもつものと考えられよう。

III. Chumshipの治療的側面

Sullivanは、自身の臨床実践の中にも前青春期的な要素を取り入れたといわれる。ここでは、chumshipを心理療法における治療関係と関連させながら考えることとする。

1. "共有経験"の意義－合意的妥当性確認の促進

Sullivanによると、前青年期の親友同士は、互いの感情や考えを包み隠さず分かち合うことで、健全な合意による確認（合意的妥当性確認）を促進し、このような体験が治療的な作用を及ぼすと考えられている。Selmanら（1990）によると、人は、合意的妥当性確認を通して、対人的理解が成長し、他者の経験の恩恵を受ける。そこでは自己中心的意味ではなく、共有された意味が対人的関係を永続的にさせるのであり、これは二人の過程を通して発達する。Selmanらは、比較的地位が等しい仲間との集中的なペア関係が、共同的関係を形成するための援助となるとの考えから「ペア・セラピー」を実践しており、そこでは「共有経験」、すなわち同じ情意（例えば笑い）の共有が重視されている。共有経験は、各人が両者のために経験を拡大する「交流的」現象であり、一緒に関与することで、各々は一人で経験する時以上に、他者を通して自己の特別な妥当性確認を得る。そして行為者は、固まった境界の"相互浸透"を経験し、交渉では感じないような"結びつき"を感じる、という。Selmanらは「共有経験は、交渉行動であるより表出行動であり、調和がとれていて、内的、対人的な葛藤がない」と指摘する。このような意味で、二者間における情緒面の共有経験が、治療的体験の役割を果たすと考えられている。

2. 類は類を癒す—Sullivanの実践

Sullivanは、統合失調症患者の治療に当たり、予後のよい統合失調症を経過したと思われる者、あるいは類似の質を備える者を看護者として選び、同性の看護者チームによる治療を行った。ヒラレルキーの構造をとる看護婦治療の体制を否定し、病棟の雰囲気をつできるだけ前青春期に近づけようとし、時には患者の前で、看護師同士に前青春期の体験を語らせたという。また、患者と治療者との相性を問題にし、特に同性が治療に当たることを推奨した。「類は類を癒す」(Sullivan,1962)という言葉に見られるように、似たような性質を持った者との関わりによって癒されるというのがSullivanによるテーゼであった。ここに、同類愛的で、chumshipに通じる関係を治療的なものとして取り入れようとしていた姿勢がうかがわれよう。Sullivanは治療者として、「自身の過去の体験と人格構成とが患者と同程度に敏感であり、人生の同じ些事にも同じ価値を置く人々を捜し求めねばならない」と、治療者が患者と同様に感じる力を持つことを重んじている。

Sullivanは、人間関係において深い傷つきをもつと考えられる統合失調症の社会的回復過程は、共感的人間の人間環境を築く過程であるといい、病棟を、患者のための個人尊重的で、共感的環境にすることを重んじた。Sullivan (1962)によると、「共感的な環境とは、普通の意味では、(患者にとっては) 残虐さがなく、その代わりに場に関与する人々の人格が無意識的な共感にもとづいた、相手のレベルまで降りていった知的な寛容さや居心地のよい無関心がある環境のことである」と言う。「真に共感的な人が分裂病患者と共に生きるとき、その基調は、対人関係に関してやや未発達な傾向性の群の体験による成長をたすけるということである。(中略) それはまさに教育の場である。言語による教育ではなく、共通の体験による教育—良質の個別指導である」(傍点筆者)。この関わりについては、「外部からの積極的な干渉のことではない」、「それはむしろ農夫が、伸びゆく作物から障害を取り除き、最適な環境を整え、よりよく成長し実を結ぶように配慮する行為にも似た、精神生物学的な手続きなのである」という。人格の再構成とは、愛着や親密さから生まれるものであり、正しい対人の場さえ与えられれば可能になると考えた。これらより、Sullivanが治療に当たっていかに患者を取り巻く場の雰囲気や、言語非言語を含むコミュニケーションの質を重視していたかがわかる。また、直接的な患者と治療者のやりとりだけではなく、患者が看護師同士の会話をきくことを治療の一環としたのは、患者自身が会話に参加しなくても、他の人間間で交わされる会話をきくという、その場に参与している環境が患者を癒すと考えたためではないか。言葉でのやりとりだけではなく、共通の"体験"が重視されており、これによって患者は、「自分は他の人間の中に存在している」という感覚を体感することができる。すなわち「共通の人間性」を感じ取ることが治療的であるとして実践されていたのではないだろうか。

3. 他者を通じた自己との出会い—内面のchumship

Sullivanが治療実践において重視した、「共感的な」コミュニケーションにおいては、どのような体験がなされるのか。ここでは、一対一のやり取りの中で生じる働きに目を向け考えてみたい。治療者が患者と同じように感じる事が、患者自身の自己(内的世界)にとってどのような影響を及ぼすのであろうか。

成田(2003)は、心理療法場面における共感について考察する中で、治療者が自分の心の井戸

を深く見通すことができると患者の心の井戸と通底する感情にまで至ることができることを示し、これを「同型的体験」と命名している。治療者は患者の内部の声を言葉にしようと努め、患者は治療者の言葉に出会うことで、患者との共鳴が生じる。「他者との間にある根源的な共鳴があったとき、人は自分が一人の人間であることを覚知し肯定することができる」、「人は他者との共鳴を触知することによって固有の自己を見出す」という。逆説的ではあるが、治療者と患者が共通の感覚をもち、共鳴することによって、患者は自分が一人の固有な存在であることを感得することが示されている。他者との「同型的体験」によって、人は自己の固有性に気づきをもたらさうような、他者を通じた自己との出会いが可能になるのではないか。そしてこのような関係の性質が治療的であると考えられるのではないだろうか。

また角野(2004)は、統合失調症を発症した青年期男性との面接の中で、治療関係の中に展開した親友関係のようなchumshipの関係が治療的展開を生じたことを示している。角野の考察によると、青年は、ある特定の同性同年齢の他者、つまり内面に存在するもうひとりの自分との関係がうまくいかずに成長したと考えられ、それが現実のchumshipにも影響を及ぼしていた。角野は、「現実の他者との親密関係は、内面のもう一人の自分との親密関係と同じ意味をもつ」といい、青年が内面でのchumshipにも何らかの傷を深く受けていて、それが発症の一因になったことを考察している。このとき治療者としては、彼との間で内的なchumship関係をやり直すことが治療的に意味のあることと考え、治療者自身のもつchumshipの力を最大限に生かし、面接でそのエネルギーを再活性化していたという。このとき青年を支えるためのよい治療関係と治療的雰囲気は、よき質のchumshipであったといい、それは「彼への誠実さと真剣さ、無償の親しみとお互い認め合うこと」であり、心理療法において行われた彼の内面のchumshipの回復が、その後の青年を支えたものと考えられている。この角野の事例では、Sullivanのいうchumshipの治療的性質が、一対一の面接の中で展開されたことによって、青年を回復へと導いたものと考えられる。ここで角野のいう、「内面のchumship」という視点が重要であろう。それは、chumを実在の人物として持つということだけではなく、chumshipという関係イメージを内在化させること、すなわちchumshipのような形の関わりが、実際の対人関係においてのみならず、自分の内面においてももてるようになるということである。Chumshipという関係は、現実場面での人間関係でありながら、同時に内面における自己との関係を開拓しうるものと捉えてよいのではないだろうか。自分の中に、実在するchumのような存在が内在化されることで、心的な危機や困難に遭ったときにも安全を取り戻すことのできる心のよりどころが形成されると言えるだろう。現実場面でのchumshipは内面のchumshipに通じているということ、そしてそれが内面におけるchum、すなわち内面のよりどころとなりうるもう一人の自分、内面における自己との関係を開拓しているという視点は重要であり、この点でchumshipが治療的関係であると考えられる。このように、chumshipは「他者を通して自己に出会う」ことを可能にするものといえよう。そしてchumshipの内在化が可能となったとき、chumshipを現実を持たなくても安定した自己を保てるようになるものと考えられる。

4. "修正感情体験" 一仲間との交流をとおしてー

Chumshipは、グループセラピーにおける仲間同士の交流の中でも治療的に働くと考えられている。鍋田(1990)は、青年期の神経症者を対象に、親密なもの、一体感などを感じさせること

を目的としたグループ・ワークを実施し、その後に参加者が適応上の改善をみた例を示し、グループの成員同士の関わりから生じる治療効果として、学童期への退行を促進する「退行促進効果」を挙げている。集団という状況の中、彼らが求めてやまなかった一体感、万能感を再体験しつつも、そこに含まれるある種の幼児性に気づき、それらを徐々に、健康で客観的な、彼らが体験し得なかった学童期的な親密感や自己評価に発展させていけたのではないかと、という。そしてグループ・ワークでは「しばしば多くの人が深い人間的な感動を体験する」、「それは、他者と共にあり、自分の価値も十分に認められ、受容され、深い共感とふれあいの世界に存在するという宗教的体験に近い状態」であり、これをSullivanのいう親密なる友を通じて抱く、素晴らしい世界に存在するという前思春期の体験ではないかと示唆している。また、吉井（2004）は、小学校時代にいじめにあい、被害意識が強く、別室登校をしていた女子中学生たちが、別室での仲間との交流を通してクラスへの復帰や自傷行為等の行動化の消失が起こった事例を示し、仲間との親密性の感情の獲得が不十分であった彼女たちが、別室での仲間との交流を通して、健康的な学童期の再体験をしたのではないかと考察している。以上に挙げた例では、学童期的な発達課題が未通過であった青年たちが、過去の発達段階に戻り、その時期の課題をやり直す、再体験をすることが、治療的効果を挙げたと示唆されている。Chumshipは、前青年期のみに体験されるものではなく、前青年期以降においても体験されうるものであろう。このような仲間同士の関わりを通してなされる体験は、セラピストがクライアントにとって過去の外傷的な対象関係を修正するような態度をとることによって治療的な展開が生じるといわれる「修正感情体験」（Alexander,1951）に通じるものであるといえるのではないだろうか。

IV Chumshipと二者関係の病理

これまでみてきたように、Chumshipは同類愛的関係であることが特徴である。ここには相手と自分を同類とみる、いわば相手と自分を同一視する心的機制が働いているが、このことによる支持的な側面だけでなく、相手と自分を同一視するがゆえに起こりうる葛藤的側面についても考える必要があるのではないだろうか。ここでは、同一化の心理力動的メカニズムとそれによって引き起こされうる病理的側面との関連について目を向けてみたい。

1. 同一視（同一化）の両価性と病理現象

Freud（1921）によると、同一視は「対象に対する感情結合の根源的な形式」であり、「手本とみなされた他我に似せて自我を形成しようと努力している」心的な働きである。一方、「同一視には、まさしく最初からアンビヴァレントな面があって、それは情愛の表現にも、排除の願望にもなりうる」と、同一視によって賞賛と憎悪の両価的感情が引き起こされる点が指摘されている。またLacan（1948,1949）は、心的発達において、外界に存在する他者の像（イマージ）に自らを投げかけながら自我を形成する人間存在のありようを、鏡像段階論の中で展開するとともに、人間には他者への同一化によって自己像を描けることで得られる安定と、一方で同一化対象によって自己が疎外される面があるということ、さらには同一化作用によって必然的に生じる攻撃性の存在について示している。このように、FreudやLacanは、同類性を感じられる他者に同一化しながら自己像を形成する際に人間の心理につきまとう感情面での両価性や、葛藤的側面に触れている。

似ている者同士のペア関係は、似ているがゆえに葛藤を引き起こしうるといえよう。このような葛藤が行動化という形で生じる可能性も考えられる。伊藤（2005）は、小学校の同級生の少女の間で起こった痛ましい事件、すなわち同い年の仲の良い友人に対して、想像を絶する攻撃がなされた事態を取り上げ、常識ではとても理解できないようなこの現実について、その背景にある両者の関係や心理動を、Lacanの「鏡像段階の通過の困難」という観点から考察している。この事件でみられた攻撃は、自分の鏡像のような存在である他者（＜鏡像的他者＞）に対する攻撃であったと捉えることができ、それは同時に自己への攻撃に等しいという。そしてこれは「鏡像段階の通過」によって自己との出会いができていない、すなわち象徴的な次元が取り入れられていないことによる事態であるという。鏡像段階の通過は、発達的には、乳児が母への同一化、すなわち外的な理想像である他者に自己を見る「外なる過程」と、母が乳児に生じる思いを受取り返すことによって＜心の器＞を乳児の中に創り出される「内なる過程」が結実して生じると考えられ、他者との深いつながりなくしては困難であり、ここが通過されていないと、鏡像を他者として受け入れ、自己と他者が共存しうるのは難しい。鏡像段階の通過における困難には、同一化の対象となる他者との出会いが早期に障害されている場合と、他者に対する過度の同一化によって、自己の内なる思いを十分に磨き上げることができなかった場合があるとされる（傍点筆者）。

以上より、親しい関係の者同士の間で生じる攻撃的な事件の中には、両者の同一化が強いがゆえに、相手の存在が自らを脅かすように感じられ、攻撃的な行動が出現するという心理動が働いたと考えられる例も存在する可能性がうかがわれよう。このような例は、強い同一化の起こった二者関係に内在する根源的な葛藤の存在を表面化させたものと考えられるのではないだろうか。

2. 前青年期にみられる病理現象とその発達の意義

このほか、前青年期における親しい二者関係によって引き起こされる病理的現象にはどのようなものがあるだろうか。吉井（2004）は、中学生女子の事例をもとに、「親密さを超えて融合した関係になった時に、過呼吸やリストカット等の生徒間の連鎖反応的な行動化をもたらす危険性には注意が必要である」と指摘する。相手との同一化が行き過ぎると、このような行動化や症状の共有が生じることがうかがわれよう。思春期女性について論じたDeutsch, H. (1944) は、思春期女性における同性同士間での同一化の強さ、及びそのパーソナリティ形成における重要性について強調する一方で、「外部世界と愛情関係を作り出す能力が自我にまだ備わらず、独立意識をもてるほどつよくなっていないこの時期の少女は、たくさんの同一化作用によって自分自身を分裂させてしまう危険をおかす」、「同一化がいったんその限界をこえると、自我は危険にさらされ、その少女のパーソナリティの特性は同一化によって根こそぎ失われてしまう」と、同一化に含まれる自我分裂の危険性を示している。相手との同一化が過ぎると自分を保てなくなるためであろう。このように、前青年期の親密な二者関係においては、相手との同一化が行き過ぎると自分を見失ってしまうという危険性を孕むという側面があることも見落としてはならないだろう。

一方、日下部ら（1979）は、学校場面で多発した過呼吸症候群、中でも思春期の2人でのヒステリーについて検討している。そして、これらの症状の共有について、従来の「疾病逃避」というネガティブな概念ではなく、この時期の親友関係形成の欲求というポジティブな面からみていく必要を強調している。日下部らによると、親しい友人間で連鎖的に生じる発作は、初発者から続発者に向けて投げかけられた呼びかけであり、続発者が発症することで初発者の心理的安定が得

られる。そして「この感応現象は、この年代特有の、同性への親密さへの欲求としてとらえられ、この欲求が他者に受け入れられたとき、2人でのヒステリーという形では発症するが、これを契機につぎの人格発展へと歩むのであり、一方、この欲求が受け入れられないとき、真のヒステリー者として存続する」といい、思春期における感応現象をパラノイア型感応と区別し、人格発達上の一段階で生じるものとして位置づけた。思春期の感応現象には、身体次元で共鳴しあうほどの同調関係がみられるが、同性友人との間で自らを相手に投げかけ映し出しながら自己形成を行っていく発達過程にあることを考えると、一時的に友人との間で同じ症状を共有するような融合関係に陥ったとしても、それは一過性のものであり、むしろその過程を経ることによって、健全な自己形成がなされるといえるのではないだろうか。以上より、前青年期における、親しい同性間での強い同一化によって生じる融合的な関係は、青年が自我分裂により自分を見失ってしまう危険性を孕んでいると同時に、そのような融合関係を経ることで自己形成の一過程を進んでいるという発達支持的な側面も持ち合わせるとする両面があると考えられる。

V. chumshipを形成するという事

では、chumshipに示される親密な二者関係を、病理的な関係と分かつものは何だろうか。Chumshipを築くことができる、すなわち「ある他者、ある特定の相手」と個と個の関係をもてるためには、それ以前の発達段階において、相手を自分と同等に尊重できるだけの、自分に対する自己信頼感や、自己の基盤を持っていることが前提となるだろう。そのためには、相手の存在によって自己の存在が脅かされない、自己と他者の共存を可能とする心的発達段階の達成、すなわち「鏡像段階の通過」(伊藤,2002)が必要である。Chumshipが築けるかどうかにおいては、このような自己の安定性の如何が問われるのだろう。

子どもたちがどの段階の心的発達を遂げているかによって、親しい同性友人との関係の持ち方もその発達段階に応じたものを展開することとなる。そしてそれは、理論上の発達年齢と一致したものではない場合もあるだろう。例えば近年取り上げられることの多い発達障害や情緒障害などを抱える子どもたちにおいては、成長の過程で自然とchumshipが形成されない場合も多いと考えられ、心理療法等の場面においては、chumshipを形成する段階からの内的作業が必要となる場合もある。その際には、治療関係を通して「内面のchumship」を形成すること、chumshipの内在化、内面におけるよりどころとなるもう一人の自分、内面における自己との関係が成立することにより、chumshipを結ぶ力を形成することが重要になると考えられる。

以上、前青年期の同性友人関係chumshipについて、発達の、および治療や病理に関連する臨床的観点から検討してきた。Chumshipは、さまざまな点において発達促進的であり心理治療的である。すなわちこの関係は、他者との間に安心して共存できる存在であることを体感させ、自己の固有性に気づきをもたらすような、他者を通じた自己との出会いを可能にする面をもつ。また、現実場面においてchumshipという関係を体験することが、一人の人間の内面におけるchum、すなわち内面における自己との関係を開拓するものであるという視点から、chumshipが治療的關係であると考えられた。一方で、親密な者同士の間における同一化が強い余り、自我の境界が明確にされないような関係を引き起こすとき、相手の存在が自己を脅かすように感じられるような危険を孕む面もある。しかしながら、例えば前青年期における感応現象には、必ずし

も否定的な意味だけでなく、人格発達上の一段階として捉えられるという視点もみられた。

本論で見てきたように、chumshipという関係自体は、何歳になろうとも展開されうるものであり、この関係のもつ発達促進的、治療的な性質が、体験する人にとってはすぐれた対人関係の経験となりうる。Sullivanは、人格の成長段階としての対人的成熟は、終わりのない位相であると考えている。Chumshipは、たとえ前青年期に経験されなくても、以降にこのような性質の関係を体験することにより、内面におけるchumshipの形成は可能となるといえるだろう。この点において、chumshipという関係そのものは、前青年期の普遍的なイメージとして人々の心の中に生き続けるものであると同時に、人々の心の健康に寄与し続けるものではないだろう。

注1) 笠原(1976)は、サリバン、ケニストン、エリクソンの見解を取り入れ、青年期を大きく四期に分けている。すなわち、10歳前後から14歳前後の「プレ青年期 (preadolescence)」、14歳前後から17歳前後の「青年前期 (early adolescence)」、17歳前後から22、3歳前後の「青年後期 (late adolescence)」、22、3歳から30歳前後までの「プレ成人期 (preadult)」である。

文献

- Alexander F 1951 Fundamentals of psychoanalysis 加藤正明・加藤浩一訳 1953 現代の精神分析 筑摩書房 p267,305.
- 伊藤良子 2005 <心の器>としての遊戯療法の場合から見てくる子どもの今. 東山紘久 伊藤良子編 2005 遊戯療法と子どもの今 京大心理臨床シリーズ3 創元社.
- Bachar E., Canetti L., Bonne O., Kaplan De-Nour A., & Shalev A.Y. 1997 Pre-adolescent chumship as a buffer against psychopathology in adolescents with weak family support and weak parental bonding. Child Psychiatry & Human Development, 27(4), 209-219.
- Bagwell C. L., Newcomb A.F., & Bukowski W.M. 1998 Preadolescent friendship and peer rejection as predictors of adult adjustment. Child Development, 69(1), 140-153.
- Blos, P 1962 On adolescence. 野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房.
- Chapman A. & Chapman M. 1980 Harry Stack Sullivan's concepts of personality development and psychiatric illness. 山中康裕監修 1994 サリヴァン入門 岩崎学術出版社, 87-91.
- Derlega V. J. & Chakin A. L. 1975 Sharing intimacy : What we reveal to others and why. 福屋武人監訳 1983 ふれあいの心理学—孤独からの脱出. 有斐閣.
- Deutsch, H . 1944 The psychology of woman 懸田克躬 塙英夫訳 1963 若い女性の心理. 日本教文社
- Freud, S. 1921 Massenpsychologie und Ich-Analyse. 小此木啓吾訳 1970 集団心理と自我の分析. フロイト著作集6 弘文堂, 195-253.
- 保坂亨・岡村達也 1986 キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討—ある事例を通して. 心理臨床学研究, 4(1), 15-26.
- 角野喜宏 2004 「凧」から「嵐」へ—孤独な旅立ちの始まり (青年期前期). 松島恭子編 2004 臨床実践からみるライフサイクルの心理療法 第六章 創元社, 105-119
- 笠原嘉 1976 今日の精神病理像. 笠原嘉他編 青年の精神病理 弘文堂, 3-28.
- 日下部康明・日下部和子 1979 学校場面で多発した過呼吸症候群—思春期の“2人でのヒステリー”について. 精神神経学雑誌 81(5), 301-310.
- 楠凡之 2002 いじめと児童虐待の臨床教育学. ミネルヴァ書房, 18-53.
- Lacan J 1948 L'agressivite en psychoanalyse 宮本忠雄他共訳 1972 精神分析における攻撃性. エクリ I 所収 弘文堂, 135-168.
- Lacan J 1949 Le stade du miroir comme formateur de la fonction du Je 宮本忠雄他共訳 1972

- <わたし>の機能を形成するものとしての鏡像段階. エクリ I 所収 弘文堂,123-134.
- Lustig J L., Wolchik S A., & Braver S L. 1992 Social support in chimships and adjustment in children of divorce. *American Journal of Community Psychology*, 20(3), 393-399.
- Mannarino A P. 1976 Friendship patterns and altruistic behavior in preadolescent males. *Developmental Psychology*, 12(6),555-556.
- Mannarino A P. 1978 Friendship patterns and self-concept development in preadolescent males. *Journal of Genetic Psychology*, 133(1),105-110.
- Mannarino A P. 1979 The relationship between friendship and altruism in preadolescent girls. *Psychiatry: Journal for the study of Interpersonal Processes*,42(3),280-284.
- 三好智子 2006 青年期初期の同性友人関係が有する発達の意味とその性差について. 京都ノートルダム女子大学 心理学部・大学院心理学研究科プシュケー第5号,25-44.
- 鍋田恭孝 1990 Sullivan, H.S.の発達論から見たグループワークの意味. 北田穰之介・馬場謙一・下坂幸三編 増補 精神発達と精神病理 金剛出版.
- 成田善弘 2003 共感、解釈、自己開示—他者と出会うということ—. *精神分析研究*,47(3),225-232.
- Piaget J. 1972 Intellectual evolution from adolescence to adulthood. 落合正行訳 1979青年期から成人期までの知的発達. 芳賀純編 1979 発達の条件と学習,187-210.
- Selman R L. & Schultz L H. 1990 Making a friend in youth. 大西文行監訳1996 ペア・セラピー：どうしたらよい友だち関係がつかれるか I 巻. 北大路書房.
- 須藤春佳 2003 前青年期のchumship体験 自己感覚との関係から. *心理臨床学研究* 20(6),546-556.
- Sullivan H. S. 1953a Conceptions of modern psychiatry. 中井久夫・山口隆 共訳 1976 現代精神医学の概念. みすず書房.
- Sullivan H. S. 1953b The Interpersonal Theory of Psychiatry. 中井久夫他訳 1990 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- Sullivan H. S. 1962 Schizophrenia as a Human Process. 中井久夫他訳 1995 分裂病は人間的過程である. みすず書房,366-367.
- 田中良仁・吉井建治 2005 チャム体験と家族凝集性が学校接近感情に及ぼす影響. *心理臨床学研究* 23(1),98-107.
- 長尾博 1997 前思春期女子のchum形成が自我発達に及ぼす影響. *教育心理学研究*,45(2),203-212.
- 吉井建治 2003 不登校におけるチャム形成の研究—先行研究からの検討—. 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編) 第18巻,77-85.
- 吉井建治 2004 別室登校の中学生グループにおけるチャム関係—スクールカウンセリングの事例—. 鳴門教育大学研究紀要(教育科学編) 第19巻,67-75.

(旧：臨床心理実践学講座 博士後期課程3回生、現：京都文教大学 専任講師)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

A Study on the Psychological Significance of Intimate Same Sex Friendship during Preadolescence,"Chumship": From Developmental and Clinical Viewpoint

SUDO Haruka

It is said that same sex friendship is important for psychological development during preadolescence. Sullivan (1953) called this "chumship" and suggested its both developmental and psychotherapeutic significance. What nature of this relationship is developmentally supportive and psychotherapeutic? In this thesis, some aspects of chumship that are considered to be developmentally supportive and psychotherapeutic were discussed. First, developmentally supportive points were as follows; 1. Chumship plays protective role during transitional period. 2. Chumship gives the sense of security and modeling function. 3. Chum becomes the medium between internal and external world. Second, some aspects considered to be psychotherapeutic were as follows; 1. Sharing experience between the two promotes "consensual validation". 2. Chumship makes humane and empathetic environment. 3. Chumship provides an isomorphic experience between the two, and enable one to meet the inner self through the relationship with the other, and 4. Chumship can provide corrective emotional experience. On the other hand, it is suggested that the psychodynamics of identification contain an emotionally ambivalent nature, so one can feel attachment and hostility to the same person. Some psychopathological phenomenon concerning chumship, for example, "hysteric a deux" in adolescence, were discussed. Thus, the nature of chumship was discussed from various aspects in this thesis.